



津波災害を乗り越え、笑顔をもたらす毛糸グッズ

青い海、青い空、潮風になびくヤシの並木に、南国の太陽。スリランカ南部に位置するウエリガマは、のどかな海岸沿いの町だ。その町で、毛糸の編み物をする若い女性たちが、2004年12月26日のスマトラ沖大地震・インド洋津波災害のことをこう話す。「数メートルもの大波が、ヤシの木もバイクも建物もすべて飲み込んだ」。

その日以降、沿岸部の100万人が避難し、15万人が生計手段を失った。青年海外協力隊員の支援が直後から始まり、4年半が経過した今も、持続的な経済復興と発展のための村落開発活動が続けられている。

ウエリガマでは、女性たちの生計向上のため、08年2月からの半年間、隊員による編み物教室が開かれていた。場所は、海岸の前にある、津波被害を受けた小さな建物。編み図など使ったこともないが、基礎技術があった彼女たちは、見る見るうちに上達していった。日本の編み物の本をもとにした作品は、ぬいぐるみにモバイルにポシェット。丁寧な手作業とかわいらしいデザインは、現地の展示即売会でも評価され、作品が売れるたびに彼女らの顔に笑顔が広がった。そして今、さらなる販路拡大を目指している。

南国の津波被災地で生まれた手編

みの毛糸グッズたち。手に取ってそのぬくもりに触れると、海の向こうにまた一つ笑顔がこぼれる。



毛糸グッズを作るウエリガマの女性と横畑桃子隊員(左)。一つ一つ心を込めて編んでいく

★毛糸グッズをプレゼント! 詳細は38ページへ→

